

して、かつ人間による認識の現実の要請にもとづいて、神名を「像」として措定し、その「像」にもとづいた神名の生成場面の「想起」と神への「祈願」によって、聖書に込められた父祖たちの神の力の経験を再生しようとしており、それこそが「神の名づけ」であり、肯定神学であることが考察された。そして、このような経験の再生による神の力への与りは、神化の要件としての「神との類似」の契機となるものであり、もう一つの要件たる「神との合一」へ直接的に向かう否定神学の営みと区別された。以上の考察において、「神の名づけ」としての肯定神学と神化との関係が明らかにされた。

伝統という歴史的連続性の「断絶」が露呈し、神の名前（概念）に込められたリアリティが失われた時代に、ディオニュシオスは名前の生み出された現場、あるいは概念の起源を問うた。そのような『神名論』の営みは、概念の歴史（あるいは概念の物語）に新たな「始まり」をもたらすものであり、人間の神化はそのような「始まり」の場所に漲る「力」に深く関わっているのである。

証聖者マクシモスにおける神化の道行き ——「善く意志すること」の可能根拠を問う——

谷 隆 一 郎

はじめに

今回、「神化の道行き」という題を掲げた。神化（θεωσις）とは一見大仰な言葉であるが、その意味するところは、「神の似像に即して創られた」とされる人間が、改めて第二の誕生のように「より善く神的存在、神的生命に参与してゆくこと」であろう。それはまた、人間の自然・本性（φύσις）が真に開花し成就してゆく道でもある。

神化とはさらに、人間が自然・本性的紐帯（結び目）となって、すべての被造物が「靈的かつ全一的交わり（エクレシア、教会）」というかたちで神的生命に与り、それを顕現させてゆくことであった。すなわち東

方教父の伝統の後期の代表者、証聖者マクシモス（580頃-662）にあって神化が問題とされるとき、自己と他者とが相俟って万物がいわば「宇宙的神化」に成りゆく道が見つめられていたのだ。この意味で神化とは、神の世界創造のわざの継続と成就を、そしてこの時間的世界（歴史）における「神の顕現の勝義のかたち」を指し示しているであろう。

ただ以下においては、それらのことを単に外側から概観するのではなくて、神化という中心的事態をその原初の発動の場面からわれわれ自身の問題として、そして自由・意志の構造そのものに関わることとして吟味し探究してゆきたい。それはまた、イエス・キリストの信・信仰やキリスト教教理を、それらがはじめて語り出された原初の使徒的経験の内側から、かなわぬまでも少しく問い披くことになるであろう。

I 原初の経験から、その根拠へ

神化ということの真相を明らかにするためには、その道の端緒となる根源的な経験が注目されなければなるまい。それは心貫かれるような驚きであり、人間・自己を超えた超越的働き（神的エネルギー・ pneuma）との出会い（カイロス）である。あるいは旧約聖書の『雅歌』に言う「愛の傷手」とそこに発動する脱自的愛の経験である（この点、ニュッサのグレゴリオスの『雅歌講話』第四、第八講話など参照）。そうした原初の経験の一つの典型は、パウロの「キリストとの出会い」に認められよう。それは後世のわれわれの及びがたい姿であるが、同時性という観点からすれば、時と処とを超えてすべての人が何ほどこか経験しうることであろう。なぜなら、主体・自己の根底を貫くかのような根源的経験においては、時代と状況が異なるさまざまな出来事も何らか同時性という性格を有するからである。

さて、パウロは「自分の意志する（欲する）善は為さず、意志しない悪を為している」（ローマ7:19）と言って、意志の分裂を赤裸々に告白している。さらにその惨めな姿を嘆いて、こう叫ぶ。「あゝ、この死の体から一体誰がわたしを救ってくれようか」と。神なるキリストの恵み・恩恵（*χάρις*）が語り出されるのは、そこにおいてであった（同、7,25）。実際、「弱さにおいてこそ神の恵みがあらわになる」（2コリント12,9）とあるように、弱さの自覚がその極みに至ったとき、そこに人間的弱さや惨めさを凌駕する神の恵みや霊（*pneuma*）が現に生成し顕現してくるであろう。そしてパウロは、そうした自己の根底を凝視して、次の透徹した言葉を発

している。

わたしはキリストとともに十字架につけられている。もはやわたしが生きているのではなくてわたしのうちでキリストが生きている。
(ガラテア 2 : 19-20)

この言葉は、自らが神的な働き（霊）を能う限り受容し宿した姿を示していると思われる。すなわちパウロは、すべての人間のあるべき姿のいわば典型として、神的エネルギー・プネウマを受容する場とも器ともなったのだ。そのようなとき、人間的・自然・本性は根底での自己否定（無化）を介して新たに「善きかたち（アレテー、徳）」に変容せしめられ、神的生命への与りの道（神化）をゆくことになろう。

しかし、もとより神の実体・本質（ウーシア）は決して知られえず、いわば無限性こそ神の名だという¹⁾。それゆえ、人間が神に何らかに関与してゆく神化の道行きは、あるとき完成して停止してしまうような類のものではありえない。が、他方、神の働き・活動（エネルギー）は、われわれによって何らかに経験され知られうるのだ。こうした「ウーシアとエネルギーとの峻別」は、とりわけ東方教父の伝統において特徴的な思想財であった。ただそれは、神認識に関する対象的な図式に留まるものではなくて、人間の最も本来的な道の構造そのものに関わるものである。つまり、人間本性が神的エネルギーを何らかに経験し、それを心披いて受容し宿すことは、創造のはじめにおいて自らに与えられた可能性がより善く開花・成就してゆくことでもある。従って、そうした神化の道行きは、いわば「不断の自己超越」（エベクタシス）として、また「絶えざる生成」として否定の調べとともに現出してくることになろう。

このような互いに通底する事柄は、問題の基本的動向を窺ったものであるが、それらを探究してゆく道は、仮に一言で言うなら「原初的経験から、その根拠へ」という標語で示されよう。そこで次節から、それらの内実を僅かながら明らかにしてゆくことにしよう。その全体に関わる基本語をあらかじめ提示しておくとして、生成、意志そして身体の三つである。す

1) 証聖者マクシモス『愛についての四百の断章』I・100。（『フィロカリア』Ⅲ，所収，谷隆一郎訳，新世社，2006年）。以下，証聖者マクシモスからの引用は著作名のみ記す。

なわち, (i), この時間的可変的世界における「神的エネルギーの生成・顕現」, (ii), そのことに不可欠の媒介的役割を果たす「人間的自由・意志」, そして(iii), そこに密接に結びついている「身体ないし身体性」という三つの事柄である。

Ⅱ 意志的(グノーメー的)聴従——神的働きと人間的働きとの協働

「わたしのうちでキリストが生きている」というくだんの言葉は, 証聖者マクシモスによれば自由(自己決定力)の廃棄ではなくて, 意志的(グノーメー的)聴従(ἐκχώρησις)を意味した²⁾。そしてそこには, 神的働きと人間的自由の働きとのある種の協働(συνεργία)が認められよう。すなわち, 神の恵みないし霊の働きは単に天下りに一方的な仕方と与えられるのではなくて, われわれが自由・意志の働きによって心披く度合に応じて, その分だけ生成し顕現してくるとされる。そのことはまた, 「信・信仰の測りないし類比(アナログア)に従って」であるとも言われている³⁾。

ただここに注意すべきは, 自由・意志(προαίρεσις)やグノーメー(γνώμη)(迷いをも含んだ意志)が, 「善く意志すること」と「悪く意志すること」との両方向にその都度開かれているということである。しかも「悪く意志する」という, 自由・意志のいわば負の可能性は, 人間の創造・生成(γένεσις)以来, さまざまな状況のもとで現実化し身体化してくるであろう。それが内的かつ外的な「罪の現出」である。「すべての人が罪のもとにある」(ローマ3:9)とされるゆえんである。

この意味でアダムとエバのいわゆる原罪(創世記第三章)は, 単に人類の祖先における過去の事象ではなくて, 普遍的にわれわれ自身の意志の構造に関わることなのだ。というのは, たとえばシェリングも言うように(『人間の自由の本質』), 人間は端的に人間として成立すると同時に意志し始めるが, そこに悪く意志する可能性も伴っているからである。そして現に悪く意志してしまうとき, 人間は「神への意志的背反」という罪のかたちを自己自身に刻印してしまうことになる⁴⁾。

さて自由・意志は, おのずから「善く意志する」のではなく, 「悪く

2) 『難問集——東方教父の伝統の精華』, PG91, 1076B. (谷隆一郎訳, 知泉書館, 2015年)。

3) 『神学と受肉の摂理とについて』V・34. (『フィロカリア』Ⅲ, 所収)。

4) 『難問集』, PG91, 1164A-D. なお, こうした根本的な事柄に関する限りは, 東方教父もたとえばアウグスティヌスも軌を一にしている。

意志する」という「神への背反」(=罪)にもつねに晒されている。それゆえ、われわれがそうした「自由の両義性」を本性的に抱えつつ、なおも「善く意志すること」、つまり「神的エネルギーに意志的に聴従すること」が成立しうるとすれば、その成立の機微と可能根拠とが問ひ披かれなければなるまい。

そこで改めて言えば、「人間が神の似像に即して創られた」とは、過去に完了した出来事ではありえず、いわば神的ロゴスのうちなる「人間かく在るべし」という定め(無時間的な原型)であろう。だが現に在るわれわれは、神的ロゴスのうちなる原型から自由・意志の悪しき働きによって頽落した原初的罪を抱えている。それゆえ、この時間的世界においてわれわれが現に人間本性の開花・成就に与り、ひいては神化の道をゆくためには、「神への意志的背反」たる罪の姿を否定し浄化してゆくことが不可欠なのだ。してみれば、人間・自己の真の成立は、何らか「頽落(=否定)の否定」という二重否定的な道を取るほかはないであろう。

しかるに、パウロの先の告白が如実に示しているように、われわれは固有の力だけでは自らの意志的背反(罪の姿)を否定し克服してゆくことができない。パウロ自身も、神の子イエス・キリストの恵み(霊)に与ることによって、はじめてそれを為しえたのであった。その際とくに注目されるのは、神の恵み、神的エネルギー・プネウマが、恐らく人間の意志的聴従というかたちでこの身、この世界に顕現してくるということである。言い換えれば、人間的な「迷いある意志」から意志的聴従への変容として、キリストの神的エネルギーが現に生成し、いわば受肉(身体化)してきたのだ。そしてそれは、ある意味で「受肉の受肉」とも言いうるであろう。

ここにおいてわれわれは、「ロゴスの受肉」、「イエス・キリストの神人性」(神性と人性とのヒュポスタシスの結合)といった事態がはじめて見出され語り出された原初的経験の場面に、改めて連れ戻されることになる。なぜならば、それらの教理的表現は単に客体的に知られるものではなく、また探究の外に前提とされるべきものでもなくて、使徒たちの伝承にしたがって、しかもまた主体・自己の根底に信じられてくる事柄だからである。しかし問題は、その信・信仰(πίστις)の意味であり、それが発語された当の根源的経験とは何なのかということである。

思うに使徒たちは、また同時性として後世の人々は、キリストとの出会

い(カイロス)に心貫かれて「愛の傷手」を受け、さらには己れを超えゆく脱自的な愛に促された。そのようなとき、彼らの根底に現前し働いていたものは何であったか。それは一言で言うなら、神のかつ人間的な働き、つまり神人的エネルギーであったと考えられる。

なぜならば、もしそれが神人的エネルギーでなければ、弱き自己の意志的背反(=罪)を否定し自己の全体(魂と身体)を脱自的な愛に変容させることはできなかつたであろう。しかし他方、もしそれが人間の境位にある人間的エネルギーでもなければ、現実人間本性に適合して働くこともなかつたであろう。とすれば、イエス・キリストに真に出会った人々にあつては、神のかつ人間的な神人的エネルギーが働いていたと言えよう。そしてそれは、ひいては神性と人性という二つの自然・本性の不可思議な交流(περιχώρησις)を証示しているのである。

かくして、キリストとの出会いにおいて人は、二つの自然・本性(ピュシス)の「二つのエネルギー」が微妙に交流していることを経験するのだ。そのとき人間的な自然・本性は、魂と身体とが相俟って全体として「神人的エネルギーへの意志的聴従のかたち」に変容しているであろう。それはまた、人間本性が神性をより善く宿しゆく神化の道でもある。

ここに改めて次の二点が確認されよう。第一に、神人的エネルギーは使徒なら使徒の「自由な意志的聴従」と「自己自身を超えゆく愛」とのうちに経験され、何らか知られうる。そして信・信仰とは本来、神人的エネルギーを現実を受容し宿したかたち(ヒュポスタシス)なのだ(ヘブライ11,1参照)。第二に、神人的エネルギーとの出会いの経験は、その発出する主体(源)たる神人性存在を遙かに指し示している。つまり使徒たちの新たに甦った「生のかたち」が、「キリストの真実」を証しているのである。

ただその際、ロゴス・キリストの受肉存在(神人性)は、そのウーシアとしては決して知られえない。が、そのエネルギーはつねに現存しており、万物を存立させている。つまり、諸々の要素を一にもたらず根源的結合力(ないし神的爱)として、現に働いているのだ。そして、かかるロゴス・キリストのエネルギーは、とりわけわれわれのより善き応答、意志的聴従をその都度の今、心の根底において促しているのである。

Ⅲ 神化の道行きと他者——「善く意志すること」, 「善きわざを為すこと」の可能根拠をめぐって

神化の道はむろん個人の内面に閉ざされたものではありえず、広義の他者との交わりを場とし、それを通してはじめて現に生成・顕現してくる。この点、印象深い言葉として、「わたしの兄弟たるこの最も小さい者にしたことは、わたし（キリスト）にしたことなのだ」（マタイ 25, 40）とある。これについて証聖者マクシモスは、いみじくも次のように語っている。

善きわざを必要としている人（この小さい者）とは神なのだ。そしてまた、善く為しうる人は、恵みと分有によって自らが神であることを証示している。なぜなら彼は、神の善きわざの働き（エネルゲイア）を受容しているからである。……もし憐れみを必要としている貧しい人が神であるのならば、それはわれわれのために貧しくなった神の降下（受肉）のゆえである。すなわち神は、それぞれの人の受苦（受難）（*πάθος*）を自らのうちで共苦という仕方（*συμπάθῳς*）で受容し、それぞれの人の受苦の類比に従ってつねに善性によって神秘的に受苦を蒙っているのである。⁵⁾

意味深長な文章であるが、その前半は恐らく次のことを意味しよう。（後半はキリストの十字架と復活にも関わることであり、後に言及する。）およそ他者との関わりは、いわば絶対他者との関わりをあらわに映し出してくる。すなわち、個別としての個別の行為などというものは実は存在せず、他者に対する一つのわざ・行為は、われわれが神に対していかに心開きいかに関わっているかを、その人の意識を越えて映し出し、現実化・身体化していると考えられよう。

このことは哲学的には、行為の根拠に関わる「善の超越性」の問題であるが、これについては次に僅かながら触れておく。われわれが有限な一つの行為を目的として（つまり、目的たる限りでとにかくも善きものとして）択ぶとき、その意志的行為は、閉ざされた有限な目的系列においては真に成立してはいない。というのも、個々の行為の成立根拠を問うてゆくなら、それは実は、究極目的たる超越的善に開かれた構造のうちで、その

5) *Mystagogia* (『神秘への参入 (奉神礼の奥義入門)』), PG91, 713A-B.

超越的善に関与してはじめて現に行爲する根拠として働きうるからである。とすれば、具体的なわざ・行爲が成立したとき、それは、われわれが超越的善（＝神）に対していかに心披き、いかに善く意志したかということであらわにしているのだ。（ただそのことは、人の目にも行爲者自身の意識にもほとんど隠されており、いわば神によって見られかつ知られていると言うべきであろう。）

ともあれ、はじめの問題場面に立ち帰ってさらに考察を加えてゆこう。パウロの言に、「わたしは自分の意志する善を為さず、意志しない悪を為している」とあった。既述のごとく、すべての人が抱えているそうした意志の分裂と罪とを否定し超え出させたのは、意志的聴従による「神的エネルギー・ pneumaの受容と宿り」であった。言い換えれば、意志的聴従という善きかたち（アレテー、徳）として神的エネルギーがこの身、この世界に生成・顕現してくるのだ。（ちなみに証聖者マクシモスにあって、アレテーとはいわば「身体化した神」としても捉えられている。）

こうした意味合いからすれば、われわれが他者との関わりにおいてほんの僅かに「善く意志すること」、「善きわざを為すこと」が成立したとき、われわれのうちにはその根拠として神的エネルギー・ pneumaが現前し働いているであろう。その際、「迷いある意志（グノーメー）」、つまり「神への背反たる罪にも傾く意志」は、くだんの意志的聴従の姿へと変容せしめられている。それはまさに、人間的・自然・本性ないし意志のうちに生じた「神的なわざ」なのだ（フィリピ2, 13参照）。

ところで、神化の道行きの根底につねに、その都度の今、神人性存在（ロゴス・キリスト）のエネルギーが現存しているということは、恐らくキリストの典型的な信・信仰を、そしてさらに「先在のキリスト」を指し示している。その機微を問うなら、次のような順序が認められよう。まずキリスト自身の信（ないし父なる神への聴従）の姿に神的エネルギー・ pneumaが十全に流入し、端的に神化が成立しているであろう。（それゆえキリストにおいては、受肉と神化とは同一のことなのだ。）次に、すべてに先んずる範型としての「キリスト自身の信・信仰」の姿に、今度はわれわれが意志的に聴従することによって、神的ないし神人的エネルギーが注ぎ込まれ宿されてくるであろう。それはまさに「受肉の受肉」という事態であり、われわれはすべてそうした現実以上の現実に招かれているのである。

さて、キリスト自身の信・信仰とは、それが父なる神への全き聴従である限りで、いわば自己否定（無化）の働きの範型でもあろう⁶⁾。そしてそれは、単に二千年前の特殊な出来事に固定されえず、むしろわれわれの意志的聴従が何ほどか生じたとき、その成立根拠として歴史上の今、ここに現前し働いていると思われる。すなわちそうした自己否定の範型的働きは、われわれがおよそ他者との関わりにあって僅かに「善く意志し、善きわざを為すこと」のうちにも、その可能根拠としてその都度の今、現に働いているであろう。

してみれば、「ロゴス・キリストの受肉」、「神性と人性とのヒュポスタシスの結合」、そして「神人的エネルギー」といった、通常は特殊なキリスト教教理に属すると看做される事柄は、その内実としてはより普遍的に「意志論の最前線」に位置する問題なのだ。もとよりイエス・キリストの受肉存在は、そのウーシアとしては知られざる超越であり無限性のうちに存する。それゆえわれわれはただ、その働きたる神的エネルギー・プネウマを、またつまりは神人的エネルギーを何ほどか経験し、それに関与してゆくことができるばかりなのだ。しかしそこにおいてこそ、人間的・本性の開花と成就、そして神化の姿が見出されるであろう。

ところでそのことは、根本的にはむしろイエス・キリストの十字架と復活との意味に密接に関わっている。端的に言えば、キリストの十字架は、恐らくは今もいつも現存する「自己否定・自己無化 (κένωσις)」の範型的働きを指し示している。そして十字架による死は、それに続くキリストの復活（甦り）によって打ち碎かれ超克された。ただそのことは、何らか客体的な事実としてではなく、むしろ真の生命の新たな顕現として経験され、聖書においてそのように証言されたのである。

すなわち、(i)、朽ちることなき真の生命の顕現たる「キリストの復活」と、(ii)、それに会い関与した使徒たちをはじめ多くの人々における「生の根本的な変容」（端的な「善きかたちの成立」）とは、分かちがたく結びついている。(i)は(ii)の超越的な根拠であり、(ii)は(i)を証示する具体的な経験である。

この点、証聖者マクシモスは、受肉と十字架と復活との根本的関わりについて、すぐれて次のように喝破している。

6) 『難問集』, PG91, 1284A-C.

神のロゴスがわれわれのために、人間本性の弱さによって十字架につけられ、また神の力によって復活せしめられたのならば、ロゴスは明らかに同じことを、つまり受肉と復活とのわざを、われわれのために今も霊的に為している。それはわれわれすべてを救うためである。⁷⁾

かくして、「ロゴスの受肉」たるキリストの働きは、いわば時と処とを越えてつねに現存しているとともに、他方、この有限な時間的世界に生きるわれわれは、ロゴス・キリストの典型的働きに歴史上のあるときに、その都度の今、能う限り聴従してゆくほかはない。そこで改めて言うなら、自由な意志的聴従の度合に応じて、つまり信・信仰の測り・類比に従って、われわれ自身が神のないし神人的エネルギーの生成・顕現に与りうるであろう。そして、こうした「つねにとあるとき」との、また「永遠と時間」との微妙な関わりを、われわれ自身が何らか担いゆくことにおいて、その名に値する「歴史性」が生起してくるのである。

Ⅳ 神化における身体性の謎・神秘——結語に代えて

「神化（神的生命への与り）の道行き」は、われわれにとって最後まで途上においてある。それゆえ、「絶えざる生成」、「不断の創造」といった言葉が（ニュッサのグレゴリオスの『モーセの生涯』、『雅歌講話』など）、神化の根本的動向を示すものとなる。しかしわれわれは、自らの絶えざる伸展・超出（エペクタシス）を志向しつつも、パウロの言う「死の体」のような弱さと罪を凝視してゆかざるをえない。そしてそこに、人間という存在者のいわば「身体性の謎・神秘」が潜んでいるのである。以下、それについて少しく触れて拙論の結びに代えることにしよう。

教父の伝統にあつては、「善なる魂が悪しき身体（さらにはこの世界）から離れて永遠の故郷に帰ることが、幸福であり救いだ」といったグノーシス主義的な把握は、決然と退けられる。そして証聖者マクシモスの場合は、「魂と身体との同時的生成」がはっきりと主張される⁸⁾。それは、往時のオリゲネス主義や古代ギリシア的な身体観を批判してのことであった。

そこで簡明に言うなら、諸々の思惟的（ロゴスの）働きは感覺的働きに

7) 『神学と受肉の摂理とについて』（前掲書）、Ⅱ・27。

8) 『難問集』、PG91, 1321C-1324C。

何らか浸透し、魂と身体とから成る人間的・本性の全体が「善きかたち（アレテー、徳）」を形成しうるとされる。従って、神化の道においても身体が排除されることは決してないのだ。なぜならば、思惟的なものと感覚的なものは両者相まって、自然・本性の成就たる「善きかたち」が現実に生成してくるための、広義の素材とも道具ともなるからである。言い換えれば、他者との関わりの中で悪や罪に陥るのも善きかたち（アレテー）に参与してゆくのも、身体を場と質料として現に生起するのだ。

その際、証聖者マクシモスにあって探究の中心線として見つめられているのは、「愛（ἀγάπη）による諸々のアレテー（徳）の統合」という事態であった⁹⁾。それは、神化の端緒たる脱自的愛が真に実り成就してきた姿でもある。それゆえ、この意味での愛は神化の道行きの原因かつ目的（終極）でもあろうが、それは愛そのものたる神（Iヨハネ4:5）にどこまでも開かれているのである。

そしてこうした「愛によるアレテーの統合」とは、人間本性そのものの開花・成就であるとともに、広義の他者との「霊的かつ全一的交わり（エクレスシア、教会）」の形成へと定位されている。すなわち、今在る人もすでに亡き人も、また人間も他の存在物も、すべてが全一的なかたちで宇宙的神化へと開かれていることが観想されていたのである。

ともあれ、総じて言えば、「ロゴス・キリストの受肉（神人性）」や「キリストの十字架と復活」といった事柄は、もしわれわれが神的エネルギー・ pneuma との原初的使徒的出会い（カイロス）の場・経験に立ち帰って、虚心に自らの身に問い披いてゆくなら、「人間本性の開花と成就」、そして「全一的交わりにおける神化の道行き」にとって、まさに普遍的な意味を有するものとなろう。そこで最後に、恐らくはすべての出来事、すべての出会いに先んじて現存する「自己否定（無化）の範型的働き」と「神の霊的かつ神人的エネルギー」に、そして「神の憐れみのわざ」に思いを潜めて、この拙い論をいわば開かれたままで終えることにしたい。

9) 同, PG91, 1248D-1249A.